



武藏河ふみ

13  
3582  
4



門 13  
號 3582  
卷 4

復仇武藏鐙卷之四

海船乃再會

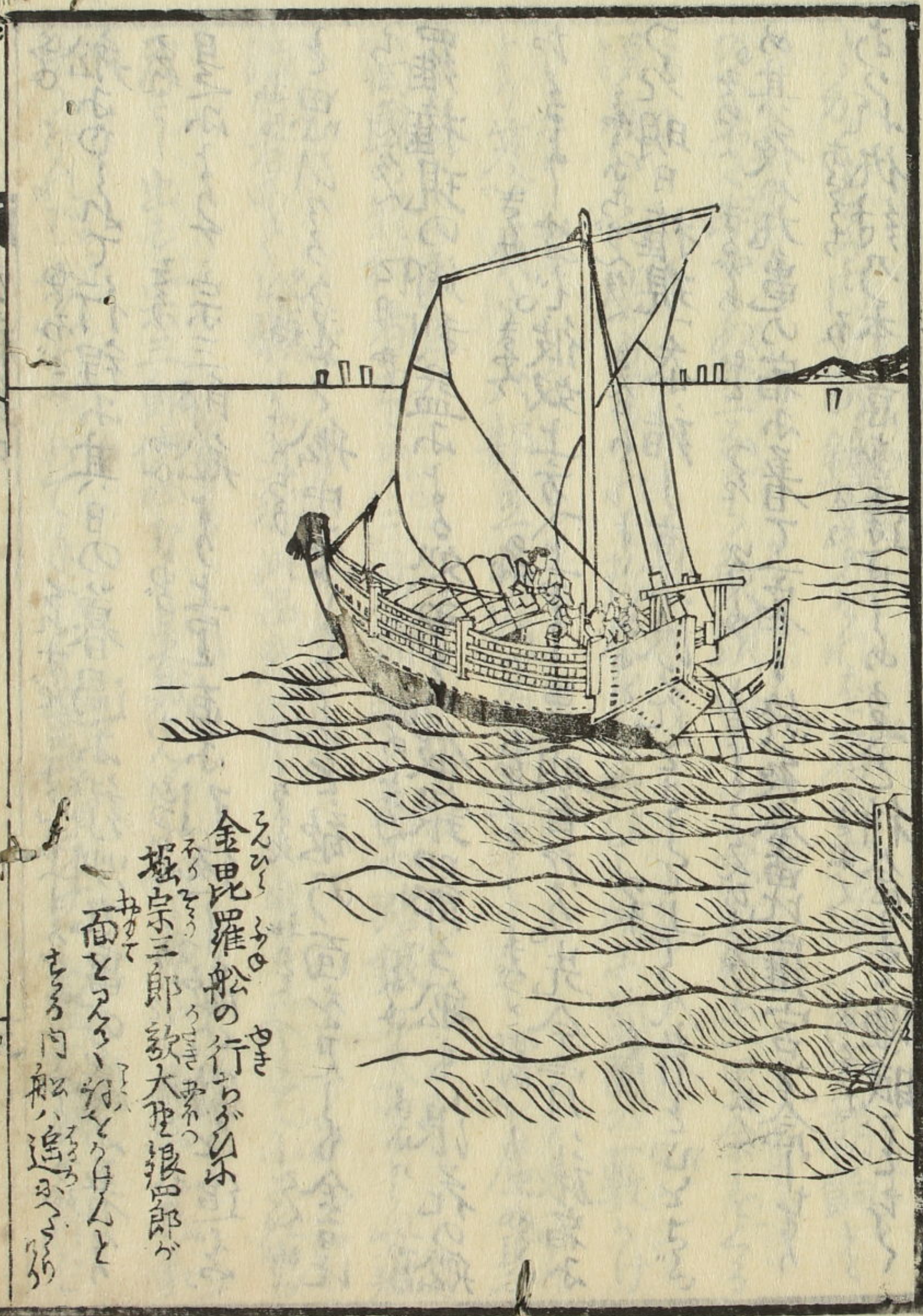


我尋んと東海道我徑々京師いり洛中洛外を尋  
廻り其年もくれり翌年二月浪花下り町々端々迄  
捜せども更ふ多しなれども宗三郎想らひ續州象  
頭山金毘羅権現之靈驗あつて心願をこむる  
者成就せむといふ事なり傳史民俗何某又近死頃膳所

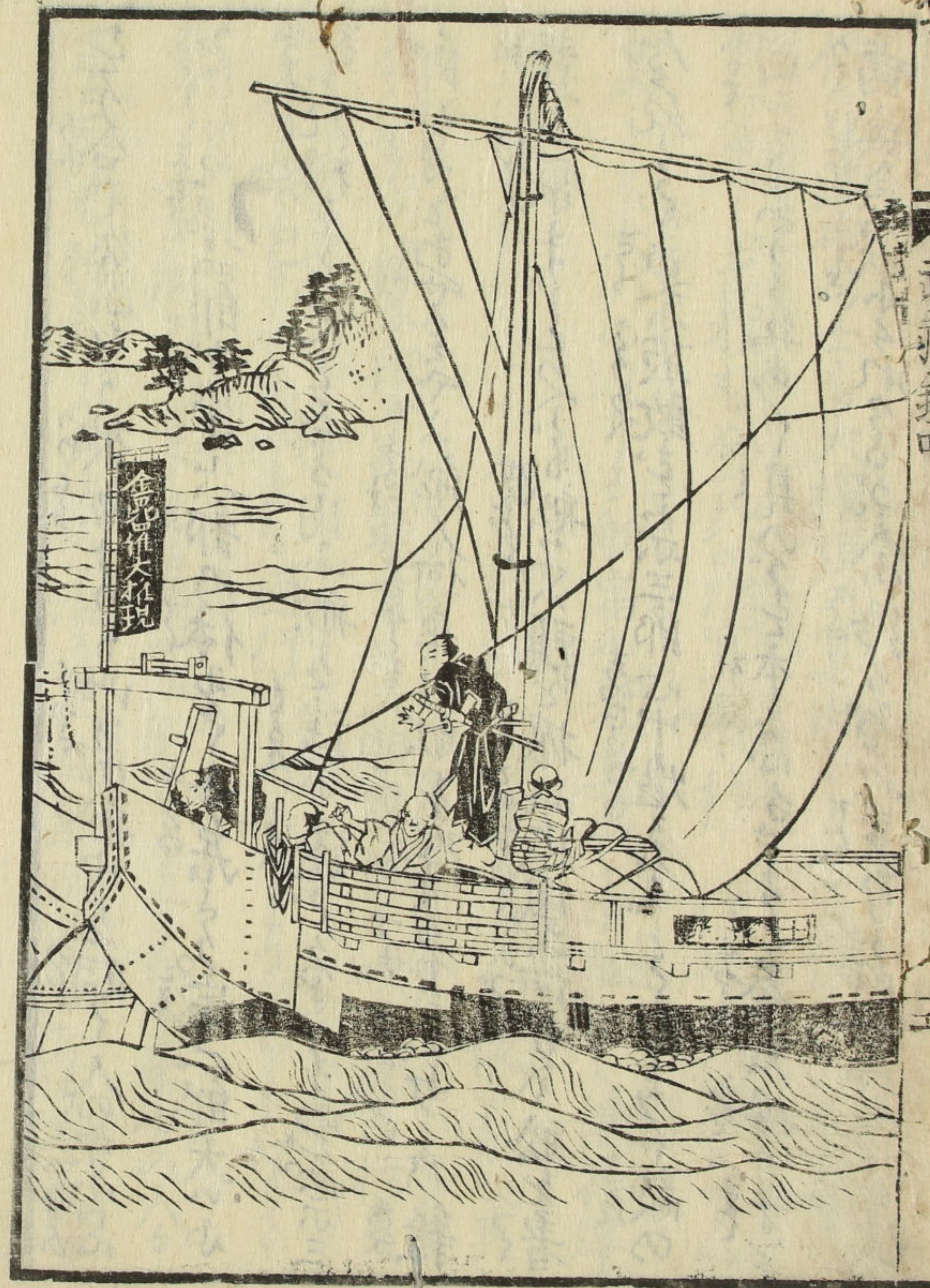
早稲田 大學 圖書館  
35.2.2  
藏書

侯の藩中の士も大権現の冥助よりて復仇の本意を  
 とげるとぞ我も金毘羅宮へ参詣し復仇の誓せし  
 めのとて大川の辺なる船宿に著其夜乗船して浪花津  
 舟漕にあれ風のまふく行程小兵庫の漆も後になり其  
 夜明石の浦小船がし翌日も又順風快く吹く船の行斐  
 とが如く已小豆嶋も過行となり下より帆をまじりて  
 登り事なる船あり是も金毘羅船と見えられぬ乗合の人々  
 宗三郎も物見よりわがめ居る内彼船間近くなりて篙と

とり合をりふなり彼船より此方の船中を覗く人の中に思  
 がけぬ銀四郎が六十六部の体あり乗居たり宗三郎大い小  
 船を遠ざくるを々々わが宗三  
 郎は身をおせをや船人何卒此船を陸へ着てよとせし乃新  
 貴の厭まがとり船子の頭を振此追風は何方に船を著  
 ぞとて更に取敢て宗三郎心中燃るがごとくたまに敵の  
 面を見るがごとくわめく見のがごとく本意をさすと奉に握り牙と  
 嚙み無念な涙を流したるが人の語るがら更にあらむ心をわらむ



金毘羅船の行りかみ  
 堀宗三郎 歌大聖 浪四郎が  
 面とらるゝ船とくんと  
 まる月船の追ふつゝ



武藏巻四

船ふねのゆりて行程ゆりぢ小其日の暮過くれすぎ小須州すしゅう九こ亀かめのた小つた著つたる  
 見みふよりて宗三そうざう郎らう船ふねより上あと直ち小ち引ひ返かへし敵かたの跡あとと追おひ  
 と思おもひくろうがふるく船中せんちゆうあくしうをと敵かた乃な面おもてをみしも金かね比ひ  
 羅ら推お現げんの御利益ごりやく益えき小こよる処ところあらぬ彼銀かのぎん四よ郎らうが船ふねも浪なみ花はなの船ふね  
 ちちるちよよややむむ彼奴かみ上かみ方かたへ上のりまりま更あ明あ白はかりり先ま今け宵このり旅り宿しゆく小  
 つつれれ明日あした推現おげん一い糸いと結むすし直ち小ち浪なみ花はなととここ上のりまるる人ひと者ものと心こころとささぶ  
 めめ其その夜よ八はち九く亀かめの宿しゆく小こ著つたて一い宿しゆく一い終しゆう夜や金かね毘ひ羅ら宮みやうと念ねんししり  
 あありりれれ仇あいつ討うち乃の本ほん意いをを達たつせせししああるると祈いの念ねんししと睡まどろ眠むしこととたたく

とかくもる内うち七しちの鐘かね中なええをを宿しゆくの女よめと呼よばば返かへて朝あ餉さうと  
 のまままで明あけけぬ空そらあらる象頭山ざうとうざんささと急いそだ行ゆく小一里余いちりあまりととくく  
 頃ころ夜よ八はちや明あけけししれれをを弥足ややくををややびびる所ところ小前面あたまの藪やぶくくけ  
 上かみりり笈ふしと負おする六部ろくぶ立た出で堀ほりが前まへ小歩あゆと上かみりりて腰こしと屈かぬ身み  
 小回國こくわいのい修しゆ行ぎやう者ものああてていいがが三さん日にち以い前ぜん賊ぞくのこ為ため小路銀ろぎんをを奪むすととれれ難がた  
 浪なみの者ものああららぬ願ねがひひ且かつ那な此品このしん買かひひととりりととりりいいととここ小こ工こう九く宮みやう  
 成なりり出でと宗三そうざう郎らう何心なにかなく是こゝ成なるる小何なにかとと人ひと見み覚さああるる  
 中なりりれれど歩あゆととりりめめててもも小蓋かきををああけてて蓋かき裏うらををんんれれど

武藏鑑四

勝興の二字を書付堀越殿の花押ありければ大分詮死中か  
 る袋と取出し見るふ蜀江の錦を覺の地紋あがら中ふ茶  
 入なり倍縫して六部ふむらひ汝何ゆゑ此品を所持するやと  
 問六部が曰されむとよ安し我ハ但馬國の者なり妻女子と先  
 ごと世に憂物ふ見捨些の田畑家材と賣しむらひ妻女子の  
 佛果の爲小大乘妙典を六十余州の國分寺に納んとうふ  
 修行者とわら廻りて阿波より此國へ來りぬ矢操山にて  
 我々とひくれば六部も逢道づれとわら緒くの靈場を廻

三日以前象頭山へ参詣し御社の下に通夜しぬふ我が  
 少時睡しひまふ彼者已が笑はさし置我笑を負て何地往ん  
 影ふんをんと我及ぬ此の路銀著類も入ぬ又残し置  
 ける彼が笑ぬハ只此宮のそあり是何の宮やうふ志がれぬ  
 我ふ有て益かり望む人ありむ此の錢も替路銀の助おせむ  
 中と昨日より往來人おひけを告て賣人ととれと維とるまある  
 人もなり其上持病さむる難法ふ及び何平情小買しうて  
 とぬれりと泣ぬむる小縁よと宗太郎ちうふつん

なるを我買とり得るは但し此袋の中茶入あらんを  
 中入るる帝之如何せやと問六部が白舌く我檢見し時より  
 只袋のちめて中茶入あるとと尋く宗三郎又曰然れ其者の  
 人相いふ何國の産かや。六部が曰年紀ハ二十八九才身  
 の丈四尺六寸中肉あく色黒く眼田く鼻のくまで及堂  
 かる生國と定くあも安と答宗三郎想らく是れ  
 郎が人相なり。渠奴此六部の後小路銀のあるは其の替  
 て去早く上方へ上りあめさうゆても茶入如何なりと

り破却と捨たをなく飲を討かむとも家名の再興  
 かりげじと胸安うらと思さう又想れし否さるるの名岳を  
 よも碎た捨たうらび是の管袋とも不賣を忽ち己が積悪の  
 露頭せし更成慮つと茶入のて賣拂いあめさるる  
 管袋のちめても我手入ると大権現の冥助あざと悦び頓  
 て懐中より歩金四ツとるは此女をれども是れ成あさめて  
 管我不得させよと尋く六部ハ大ハ悦び厚く謝してぞ  
 立去る宗三郎ハ管と縁包小収め定をすやめく行程小

西井金剛  
わどちかく象頭山ざうづきんふ著登山つたとうして金毘羅宮こんぴらぐうの窟くわ前まへに  
ぬづれたありれ敵たてと討うちとり名岳なみきと取得とくえさめぬと誠心まことこころ  
をこぼし一時いつときむろ祈念きねんし再び山を下り九亀くわがめの旅宿りよしゆく  
小夜こよ夜よ成なりあじあじ習音しゆいん備前びぜんへへるる船ふね小便びんせん船せん。其日そのひ八田  
の口くち著つたるる一宿いつしゆく一習いちしゆ早天さうてんふ起出おきたでてて瑜伽山ゆがさんへへ糸結いとむすし  
當社とうしゃでも復仇ふくちゆうの祈願きげんとてめ山を下りて陸路りくじを歩あゆ  
み夜よ成なり日ひふふ嗣ついで浪なみ花はな成なり心こころぞぞ央管おのすう道みち成なりをを急いそぐぐ  
兵庫ひんぐうのの縁伯えんぱく

斯かくてて堀宗三郎ほりむねさぶろう二日ふたひと宿しゆくと重おもてて已まふま明石あきしへへるる次つぎ  
ハ早はや七ななツ過すだわりわりくれくれどもども仇あひと追おの心こころ急いそかか明石あきしもも宿しゆくととるる  
と大倉谷おほくらやにも歩過あゆみこてて舞子まいこの濱なみふふるる頃ころハ早はや日ひ論ろん  
も西海さいかい小波せうなみ折をりしも二月廿二日ふたつきにふたにふたひの月つきまま出いでぬぬ園路おんじあり  
縁えん投灯なげとうふ火ひととりり片手かたて小提こててて急いそかか行ゆ此所こゝハ名な合あ  
名所などころまでまで磯辺いそべふ續つづくく踊松おどりまつ昼ひるハ眺望てうぼうもも一ひとハ自みづかあるある所ところ  
わがらわがらの夜よハ寂寥せきれうと物凄ものすけくく人の往來ゆきまもも稀まれりて磯いそ  
お浪なみと松風まつかぜの音魂ねたまを寒さむくくむむ松まつハ左手ひだりての松林まつばやしより

式部卿





山崎の国に  
おきかへりて  
おきかへりて  
おきかへりて



山崎の国に  
おきかへりて  
おきかへりて  
おきかへりて

雲空ごとく大男二四人あつれ出宗三郎を中へ獲てやよ待  
 旅の者路銀あつて投出と通すと云はく一人を胸もとを  
 搦て今を懐へ手に入んと宗三郎早く身をはり移つて  
 提灯を投捨前なる賊の鼻柱を強く撃つとらんと言  
 々々々放一足三足とあつて一人の賊が腕首突放  
 一我の長し浪る小路銀を時者あつてむと骨を  
 折るとり内小賊どもへ手毎小朴力を抜つれ路銀を  
 衣服大小をさし出せ拒款せせ命と断人と早三方上

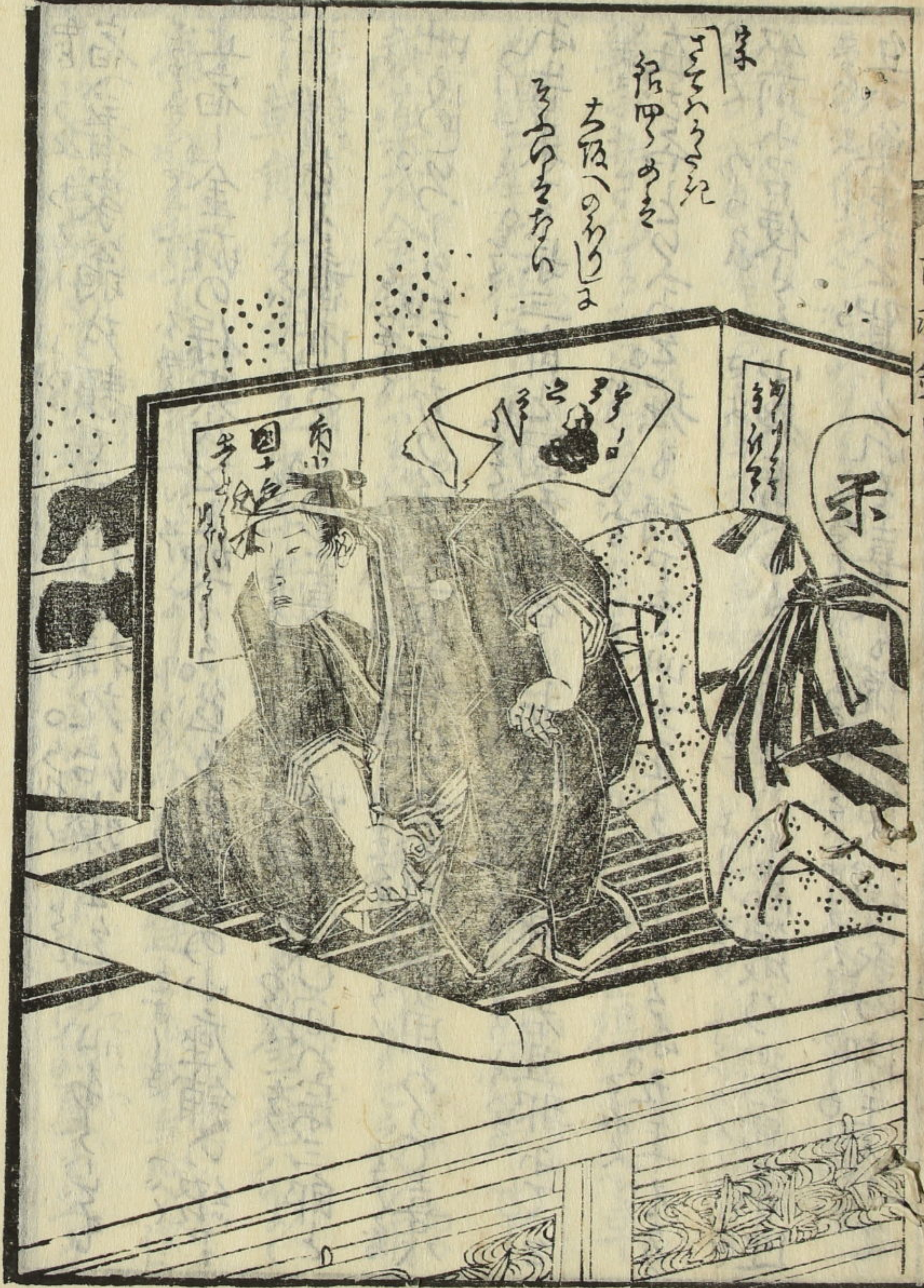
斬てくろ宗三郎も同じ抜合一子とけ声もろともは向ふ  
 一賊が真向丁と斬をあつと叫び子負あつて逃去り  
 残の三賊猶も恐るを二急斬くろ飛鳥のどく身を  
 踊一彼成る是を受透間を移ら星明り又一人の賊が肩  
 尖へ刀あぶせる程もなく右手へ附込一賊が刀を急小くんと  
 二の腕を浅疵負ながら又一賊が小髭負きとんと斬賊們  
 其手煉ふ恐怖と名東西へ逃去り握六東と望と百歩斗  
 追往しが初て手疵の痛と覚へると手拭いで去ると





女房  
「まをうゝまをんが  
あそぶとておぼ  
のちうゝまのあつと  
おぼのちまませ

おぼのちまませ  
おぼのちまませ  
おぼのちまませ



ま  
まをうゝま  
おぼのちまませ  
おぼのちまませ

武藏鑑四

在いま一ひとくろくとと三人何是と終結はつらひ。是これより小夜さよハ朝夕あさゆふ小来り  
 茶ちやと前まへ下くだ膏かう茶ちや然しからも替かりはじくるふど宗三郎むねさぶろう大おほ悦よろこび金  
 瘡かさも半なハ治ちや一ひとくろふと風邪ふうじゃハ犯おこされは初はつの中ちゆうふお卧ふ々々あ  
 年来ねんらい心こころ勞らうの積つみふや衝しづ々々ふ熱ねつ氣き壯さうふなりて早はやハ時とき疫えきもも乃  
 疰ぢとわろと枕まくらも上あられを喜よろこハ夫婦ふうふ大おほおどろ死し旅りゆう宿しゆくあてて  
 万まん更ぜい行ぎやう届とどび。回ま狭せまわれども我家わがやへ引ひきり保たも養やしやうをまめ進ませ  
 人ひととて迎むかへり小夜さよハ朝夕あさゆふ枕まくら迎むかへありて者もの病やま一ひとくろふど宗三郎  
 深ふかく其その実まこと意いと感かんト。販はん茶ちや急いそりはじく一日いちにちも早はやく本ほん復ふくふく

めのへと金毘羅こんぴら権現ごんげんを祈いの念ねんをま外ほかを他た更まもなしし法ほふ小せう或あ日  
 小夜さよが伽が結けつ曰いは弑ころ水みづの流ながれと人の行ゆき末すえをま定さだめた死し物ものハは心こころ  
 下くだ深ふか中ちゆうある大野銀四郎おほのぎんしやう主ぬし六十六部むそくじゅうろくとありて一の谷いちのや近ちか在  
 の道場みちばふ泊とまりふふの寺てらの屋根やね乃すなは破やぶ損そんせら彼かの人ひとははくくるふみ  
 比ひより住僧ぢゆうそうと知し巴はなり彼住僧かのぢゆうそうより夫喜むぎハ頼たのむま大工おほの下した使  
 めもあをあ使つかてよとて銀四郎ぎんしやう主ぬしをま越こえまるふ由ゆ急いそ浪なみ花はななる夫  
 が兄あに子この方かたへ頼たのむまめめとて銀四郎ぎんしやう主ぬしの实親まことの弟あに子こハ  
 姓せい逢あ其その实親まことハ武藏むさしなる下谷村したやむらと申まを居するふよよをま傳つたへ

浪花をきて武藏なる実親のものと返られと昨日の便安  
 たる事と何心か死回どがうふ宗三郎八思ふと病床に列せ  
 我故あやそ其銀四郎う行方を尋んとの此年月あまよく諸  
 國を回さるるとも銀四郎が浪花へ上りし頃の頃そ小夜指を  
 折るるより廿日むより前あていと各宗三郎心中お日とく我  
 船中より這奴が面を記日よりあままで三十六日と往る諸の渠  
 浪花へ上るるを此辺に滞留して在るやあまむらむるを是非も  
 かりきるる廿日以前浪花へ上りしあまむらむるを是我伊駒屋へ看し

日より十日をく後の妻なる噫神多ぬ身を如何せんと独心  
 苦しめたるが又思ふし否其時あるとも金瘡保養最中あれ  
 む討得がと今已お海愈し病氣がふ少し息を武藏へ  
 尋むらんぬと我お同我お答お夜お実事を明きと喜ぶ飯  
 宅を待居るるお小暮過る頃喜はるるれを早速病床へ招  
 け銀四郎を更を回しお夜がう所といよりれを諸へ銀四郎と  
 武藏へ下りしお相違かして心ま矢猛おれどもいま病中  
 おれに力なく猶夫婦が管顧おたりて保養する程ふよく四

月中旬あつちゆう小このり病びやう氣き平へい愈ゆ一ひと氣き力りき分ぶんづづれれも喜き八  
 夫婦ふうふ小このり及およ成なりつけ路ろ銀ぎんの中なかと分わかちて心こころむむううの謝あやま物ものををおお死し  
 我われ世よ出いるるななららむむ此この度たびの恩おん義ぎを厚あつく報ひら答たすすとてとらられれと  
 礼れい謝しゃ一ひと別べつを告つるるふふと夫おとこ婦めかけハ今いまままぞぞく保たも養やしをを加かへへと留とどむ  
 是こゝと宗むね三さん郎らう固かたく辞かたししとるるふふより此この上うへとて夫おとこ婦めかけ船ふね場ばままに送かへ  
 且かつ遂つひ小こ枝えだととううちち多たるる宗むね三さん郎らうハ浪なみ花はなへ通とほるる船ふね不ふ便べん船ふね一ひと兵へい  
 庫くらの地ちををままのれ浪なみ花はな津つとてとううりり  
 復たがひ仇あやむむとと鑑かん卷まき四よ終つひ

六号ノ五